

新刊紹介

上田博・瀧本和成編

『明治文芸館』IV—20世紀初頭の

文学「明星」創刊とその時代—

田邊 匡

(本学非常勤講師)

本書の特色の一つは、「明治文学」ではなく「明治文芸館」と銘うったところに示されているように思われる。

つまり十九世紀と二十世紀にまたがる時代社会を一つの「明治空間」として把握し、あくまでも日本人であることを捨てず、「和魂洋才」をモットーに近代国家を築いていく中で、文学と社会的現象、出版動向等をテーマに「論叢」「研究ノート」は無論のこと、「作家と作品」「資料篇」「資料館案内」更には活動写真館、建築、演劇界までも網羅した「明治の森」と多岐にわたり、全体として「文芸館」を散策するような構成になっているあたりは、従来のいわゆる明治文学史とはひ

と味違った贅沢な趣さえ漂う内容となっている。

特色の二点目は、二十名を越える執筆者のほとんどが、大学の非常勤講師や、大学院生といった三、四十代の研究者で占められていて、本文の随所に若手らしいさん新たな見解が見られることである。

更にもう一点つけ加えるとすれば、与謝野鉄幹によつて東京新詩社から「明星」が創刊されたのが明治三十三年（一九〇〇）四月であり、その翌年八月には晶子の『みだれ髪』が出版されたわけだが、それから丁度百年後の二十世紀の終りの年に照準を合せるかのように、実にタイミングよくこの本が出版されたところに意義深いものを感じるの、私一人だけだろうか。

(嵯峨野書院 全五巻シリーズの第一回)

配本 一九九九年十一月 二二〇頁

本体価格二、〇〇〇円)

中川成美・長谷川啓編

『高橋たか子の風景』

村田裕子

高橋たか子を語ることの困難さは、彼女の属性が彼女とその小説を規定してしまふことにある。それは彼女が高橋和巳の妻であり、女性作家であり、クリスチヤンであるということ、彼女とその小説が読む前に既に読み込まれてしまつていくという不幸を意味する。それはまた〈日本近代文学〉という領域で読み込まれてきた無数の作家たちについても同様である。文学という限定された領域においてひとりの作家を分類することで、ひとつひとつの小説と読書という行為の意味はこぼれ落ちて忘れ去られてしまったのではないか。

十人の気鋭の執筆陣による初めての高橋たか子論集である本書は「統一的な批評の視点を定めず、さまざまな読みの可能性をこころみた」ことで、読みの限定